

東京大学総合研究博物館小石川分館

[建築博物教室](#) 第 11 回

石器のアーキテクチャ ——減少のデザインに秘められた人類の進化

日時：2016 年 11 月 26 日(土) 13:30- 15:00

講師：佐野勝宏（東京大学総合研究博物館特任助教／先史考古学）

建築博物教室レポート

今回は東京大学総合研究博物館特任助教の佐野勝宏先生による、「石器のアーキテクチャ」と題された講演であった。11 回を数える建築博物教室のなかで、今回初めて素材をテーマに扱った回であった。以下、当日の講演の概要を摘記する。

石器とは岩石を素材として製作された人類史上最初の道具である。石器が土器や青銅器、鉄器などと異なる最大の点は、素材を打ち割って整えることを繰り返して利用されることであり、岩石そのものが減少を繰り返しながら石器となる。これを **Reduction Sequence** と呼ぶ。素材を次々と組み立てていく建築(**Construction**)とは対照的な原理であることがわかるだろう。そして、石器のデザインは大きく技術・機能・流行の 3 要素で決まるが、どの要素が石器のデザインに大きく影響するかは、どういった変化に注目するかによる、ということを描する。例えば、デザインの時間的な変化は技術の発達が最も影響を与え、地理的なデザインの変化には流行の影響が大きく、同じ時代、空間に残された石器でも機能が異なれば全く違ったデザインになるのである。今回は人類の進化とデザインの変化との関連に注目するため、地理的環境をシリア・ヤブルド岩陰遺跡に、機能をスクレイパー(皮なめし等に使う道具)に固定してデザインの変化を追った。

ヤブルド岩陰遺跡で最も古い時代は前期旧石器時代の終わり頃であるが、その頃に製作されたスクレイパーは、原石に簡単な調整加工を施し、石器の素材となる小さな剥片を剥離し、その後小さな剥片に刃面を作り出す。剥片を剥離する方法が場当たりのため、その生産性は低い。また、この頃の石器は手に持って使うことを意図したデザインとなっている。続く中期旧石器時代になると、ルヴァロワ技法と呼ばれる、原石を入念に加工することで定型的な剥片(ルヴァロワ剥片)を取り出し、その剥片に加工を施して石器を製作する技法が出現した。ルヴァロワ技法の開発によって、定型的な剥片、つまり石器の原型を規格化して生産することが可能になったので、使用する石器の機能が違っても同じデザインが可能となり、石器の大量生産を実現した。この頃の人類は石器を木の柄に装着して使用するようになったが、これもルヴァロワ技法による石器製作が影響していると考えられ、他のものに装着できるような石器のデザインがなされていた。また、ルヴァロワ技法で作られた石器を木の柄に装着して使用するの、人類が二つの道具を組み合わせ使用したことが考古学によって確認された最古の事例である。後期旧石器時代になると、原石を入念に加工して縦長の剥片(石刃)を繰り返し剥離する石刃技法が開発される。ルヴァロワ技法

よりも石器の原型となる剥片の大量生産と規格化が可能となり、石器そのものがスリムかつ軽量化される。また、刃はちょうど鉛筆を削って使い続けるように、磨耗すれば削って刃を再生することで使い続けていた。つまり、この頃の石器は繰り返し使うことができるように考えられたデザインであり、その背景には石器製作技法の発展による生産性の拡大とそれに伴う軽量化、規格化の進行が考えられるのである。そして、このような製作技法の変化による石器の変化が、人類の狩猟方法の変化にどう影響しているのか、という現在取り組んでいる研究についての言及があった。

以上が講演の概要であるが、最後に会場からいくつか質問があった。石器をデザインするうえで美意識のようなものはあったのか、という質問に対しては、約 85 万年前のハンドアックスに三次元での対称性が見られることから、美意識が萌芽していたのではないかとのことであった。また、石器の製作者と使用者の関係について質問があったが、おそらくあらゆる人が石器を製作・使用していたと推測しているとのことであった。製作者と使用者の問題については、土器の場合もそうであるが民族誌の事例からの推測であり、考古学的に男女間や職能などでの分業が成立していたかどうかについては証明できていない。ただし、石器は世界中のどの集団でも普及していたということはわかっている。他にも、石器と自然石の見分け方など興味深い質問が出され、盛況のうちに建築博物教室は終了した。

今回の建築博物教室では、冒頭でも言及したように初めて素材を正面から扱った内容となった。多くのモノは様々な素材を組み合わせることである機能を持ち、モノとして完成する。一方、石器は減少を繰り返すことでデザインされ、モノとして完成するという点は、今まで建築博物教室で扱われてきた事例とは趣を異にする。しかし、建築の素材を例にとって考えてみると、建物に使用される材木は本来の形から加工されて、建物の素材の一部となっている。つまり、木材の利用の歴史も石器と同様に、最初は自然木をそのまま利用していた状態から、加工を重ねることで建物の部材となり、またより洗練された道具として使用されるようになっていたと考えられるのである。植物や動物の骨・皮といった素材の利用方法についても同様のことが言えるだろう。アーキテクチャ(構成原理)を考えると、どうしても何かを組み立てて増やしていくという方向に考えがちであったが、今回の講演を聞いて、減少させることで新しい機能を持たせるという方法もあるということを知ることができた。石器と木材という減少のデザインが意識されるモノ同士を組み合わせることが、人類の可能性を広げたと考えることもできるのではないだろうか。モノを組み合わせるといふことの背景には、素材を減少させるという原理が働いている場合もあるということが、今回の講演で特に印象に残った。旧石器時代という不確実性の多い、説明が難しい時代ではあるが、実験考古学による石器製作の実演の映像を随所に織り交ぜた講演となっており、初心者にもとてもわかりやすく興味深い内容であった。人類の進化、そして人類が有効に使える資源が減少していくとみられる近未来社会について考えるうえでも示唆に富む内容の講演であり、多くの来場者の方々にも深い印象を残したのではないだろうか。

(垣中 健志／小石川分館学生ボランティア)